

## 明治初期に於ける大谷派の學事史

水 谷 壽

同じ大谷派の學事史で有つても廣い意味に考へれば各地に於ける私塾等の如きも勿論記述せねばならぬので有るが、今は大谷派本願寺直接の經營にかゝる分に止めて其の明治十五年頃迄の學事施設の推移を略述する事としよう。

寛文年中第十四世琢如上人によつて一派の自衛統一上本山枳殻邸の西北に僧叢學舎の開設が有つてより宗門子弟一般に其學術研究の講筵が開放された譯であるが、正徳五年始めて講師職を置いて一派の學頭と爲し慧空其任に就き次で慧然に及び、寶曆五年學舎を高倉魚棚に移して學寮定入寮制約等内外の結構完備するに至つて勃然として一派の學事は振興したので有る。

爾來、本學舎を高倉學寮と稱し文化文政の全盛時代を出現せしめて二百餘年一派の學事は連綿として繼續して來たので有るが嘉永以降文久元治の頃に至つて世上漸く騒然とし幕府の威令に兎角の支障を來すや禁制の邪宗門耶蘇教は漸く蔓延せんとしたので有る。是れが爲め慶應二年一月十二日耶蘇教取締に付て宗内に委員が設けられ、晴雲寺、淨林寺、泉龍寺、衆會所の役僧、福成寺、光徳

寺等八名並に學寮の講者残らず呼出仰付られたので有る。又五月十五日には學寮の結衆に對して御書立を下し香山院を呼懸けて文化文政兩度の御書立に相添へて渡された、夫れには近來世上不穩異變の事出來苦慮一方ならず此際殊更に粉骨碎身修學練磨以て自信教人信の大義を誤らざることを勧め、且つ近年學寮懸席の輩減少候こと不本意然らざる旨を誠め認めたもので有つた。翌慶應三年四月二十三日學寮の轉地並に再建の義に付て御書立が學寮に於て披露された。其の御書立には方今不測の形勢殊に耶蘇教密行のこと等御化導の障害一方ならず其相伏眼前に現起せるに付き愈々奮勵努力修學すべき旨が認められた。

以上は後來記述の便宜の爲め明治以前に溯つたので有るが、徳川末期より我宗門教學の上に一大刺撃と考慮を促したものは實に邪宗門耶蘇教の侵出であつた、是れやがて王政維新の新機運と相俟つて明治年間に於ける宗門學事の施設を決定せしむるので有つた。

されば、明治政府の確立するや眞宗各派協力して邪宗門禁止の歎願を爲した。それが爲め明治元年七月十日には各派東福寺内即宗院に會合して協議し十三日には當派兩門主香山院闡彰院を隨行せしめて西本願寺飛雲閣へ成らせられ、特に東西協力して外教防禦すべきの御懇談を遂げられた。又派内に對しては元年四月二十六日香山院に對して諸國の人才を推舉すべき旨を達すると共に二十九年には諸事御取締の御直命御書立を披露し、七月二十五日特に學寮及堂僧に對して邪教防禦の心得

に付て左の御達書が出たので有る。

### 御達

此度眞宗御一同御示談の上各寺御願書を以て護法の爲め切支丹の義斷然御國禁の趣き教諭に及び申すべく辨事御中へ仰立てられ候に付き若や只今にても右御願の旨御採用に相成候節は講者並是迄修學の寮司を始め右御用に御召仕爲さるべく候思召の處その節に相成邪教の旨趣彼教の一端も其心得無之候ては第一御本山の瑕瑾學寮の名折(中略)今日より在京講者は勿論寮内寮外副講相勤居候程の寮司又末々所化迄も其才力相應に邪教の次第心得急速に研究致置き何時にても御用の御差支に相成らざる様精々取調致すべし云(下略)

斯くて八月九日學寮の講者を始め有志の者が外教研究の爲め井波邸を借受けて開講した處のものが所謂護法場なるもので有る。嗣講闡彰院東瀛は其の總轄で有つた。十一月六日學寮に於て在京講者を始め所化一同集會し本山よりは宇野相馬、川那邊大監、松井權之丞の三人が出席し、教學二途に關して一大評定が開かれた。此時本山御假建の御臺所残らず學寮へ下附され護法場は井波邸よりは處へ移されたので有る。所が此の護法場に集る青年僧侶の間に王政維新の旨趣に基いて本山の弊政を改革せんと企てる者が有つて、明治二年四月廿九日一大騷擾を起したのである。此が爲め總轄闡彰院は叱責、主謀者皆順寺周曉等三人は七日間の謹慎、家臣集會所各々處分を受けて落着いたので

あるが、當時の護法場の空氣の如何なるものか窺はれる。

六月十四日には關彰院開華院香山院賢殊院連名を以て學寮より四ヶ條の口上覺が呈出されて居る三年六月十日には學寮に對して特に宗部の研究に注意すべき旨が布達され、八月一日には法主の命に依て講者中より眞宗規則なる一書が奉呈されて居る。九月には員外擬講の制度が設けられた。當時の擬講は學階で無く講師嗣講と共に一つの學職で有つて一定の内規が有り人員に限度が有つたが今度人才拔擢の方法が組まれてから自然定員超過の結果になつたが爲め員外擬講の名稱が置かれたのである。四年五月十二日には開華院法住師が講師に任せられた。九月香山院は學寮振起に付いて衆議を求める所があつた。十月三日關彰院は本山の舊弊改革の事から舊臣の怨を受け嗣講寮に於て暗殺された。かくの如く本山に學寮に志ある者が全力を舉げて粉骨碎身せる間にも外には御一新の餘勢神佛判然の詔を曲解して全國各地に所謂廢佛毀釋が行はれ一般の人士に法滅の機至るかと思はしめたのである。されば五年正月學寮入役所化一同より本山に建白せる一書の中にも、

近來寺院廢合の處置被行候事は畢竟各寺住僧の輩儉安遊惰内宗に無益外世教に有害より起る義乃至御當山者從來子孫相續の風儀に根據し雖僧と雖も出願に任せ容易に住職免許被爲<sub>レ</sub>在之御事乍恐文明の時體に適せず維新の制度に相戻り候様に奉存候苟も一寺の住職は宗教を弘通し萬民を教育すべき身分に候間(中略)學寮結夏三年の者に非ざれば住職免許無之様の軌模を開かせられ度く

## 懇願し奉り候(下略)

と記されてゐる。當時如何に學寮は内外に亘つて審議し建白し改革したかゞ窺はれる。明治四年一月政府は社寺現有境内以外の土地官沒を布達した。學寮は本山境外に在るが爲め土地處分を受けたのである。そこで京都府に土地拂下げの申請を爲し五年三月廿日に許可せられた。其時の料金三百圓は當時學寮の講者に於て支辨せられた。六年八月十五日には本山内に翻譯局が設置され局長には成島柳北が任せられた。梵英文典一卷十二冊、リクベード二卷三十一冊等梵書翻譯の事業が行はれた。當時の稿本は現に大谷大學圖書館に保存され當時の出版本の破本が教學部の倉庫に在つた。是等の事業の起つた所以のものも又時勢の然らしむるもので有らう。此の事業は八年七月廿二日譯文局と改稱し貫練場内に移轉した。同時に編集局が設けられ八月七日編集書目編集定則が制定され八日編集局の開業式が行はれた。當時翻譯局に於ける役員は一級より七級まで有つて一級は局長成島柳北である。二級は副長一等證義三級は譯師二等證義一等潤文師一等筆師四級は譯師補三等證義二等潤文師授字師二等筆師五級は附屬潤文生授字助教筆生六級は附屬出仕七級は筆生である。以上は譯文課の等級であつて教授課には一級に督學二級に提學三級に大講士一等講說師四級に中講士二等講說師五級に小講士講說者六級に檢討講說者補七級に寮長が有るが、此の教授の方は勿論局の本意では無く譯出を以て正業と爲したので有る。尙一級は月俸十五圓二級は十三圓三級は十一圓四級

は九圓五級は七圓六級は五圓七級三圓で有つた。外に翻譯料として印度原文編纂が十行二十字一枚五十錢國字譯が三十七錢五厘であつた。此の外、旅費等その等級に應じて支給された。今當時の局員を見るに局長成島柳北譯師舟橋振太郎譯師補國井忠雄附屬鈴木晦海同山崎久太郎眞田勉附屬試補栗原重冬内藤盛孝同前田時敏西館純一筆生富士澤信誠竹内財次郎の諸氏である。就中、局長成島柳北は舊幕の才學で有つて本山翻譯局事業の一方に於て當時日本の五大新聞で有つた横濱毎日新聞、東京日々、郵便報知、朝野、曙に執筆して一種輕快な筆致を以て令名を馳せた人であつた。

六年八月廿五日法主より學寮講者嗣講へ左の御達書があつた。

今般總務職相設候上者學寮百般之制度以來於寺務所統轄爲致候事

是に於て學寮自治の制度權能も爾來宗政權能の中に收められて仕舞つたのである。學事史上注目すべきもので有らう。引續いて廿七日學寮に對して左の三通の御達書が有つた。

一、學寮之名稱今般貫練場と改稱に相成候事

一、講師嗣講等擬寮司に至るまで總而從前之學階名稱被廢候事

一、從前之學階名稱被廢候に付改て一等學師二等學師之名稱被相設候事

寛文年中以來稱へ來つた學寮の名も政府所管の學校と其の名稱が混濫すると云ふ理由に依て貫練場と改稱されたのであるが、後來屢々校名の改稱と共に制度の改變が有るが恐らく是れが最初の改

稱改變で有らう、蓋し貫練の名は大經の貫練群籍より採つたもので有る。尙同日左の通申付があつた。

一等學師 圓光寺前住職 樋口 龍温

二等學師 憶念寺住職 南條 神興

同 光蓮寺住職 村上 雲溪

次で廿八日元學寮へ左の達書が有つた。

一、從來用來候上首之名稱被廢事

但諸記錄等出張幹事へ引渡可申事

一、上首被廢候に付更に幹事出張爲致候事

九月八日今度の學寮改正に付いて講師所化一同御呼出の上大廣間(もとの寢殿)に於て左の御直諭があつた。

余惟ふに御維新の時に際し本山凡百の改正を致すに付内以宗基を堅固にし外以て朝政を贊揚せんと欲せば宜しく本末協和名實相副制度一に歸せしむべし茲に學寮の義は創建以來一百餘年末派の僧侶をして群籍を貫練せしむと雖も因襲の久しき或は其名あつて其實の擧らざるものあり(中略)仍て今更に學寮を貫練場と改正し百般の規則を釐正す(下略)

尙九月三十日貫練場入疊の節は實名を用ひ從來の席名を廢止する旨が達せられた。明治七年四月一日三等學師宮地義天春講の講師に任せられたのであるが、此の時より講釋任命の者は三等學師であつても講師と稱することに成つた。これは慶長の頃御長屋に於て講釋仰付られた時分その都度毎に講釋する者を講師と稱したのであるが、その故實に復されたものである。又同月一二等學師の下に三等學師儀同學師儀同學師補の學階を置いた。宮地義天占部觀順が三等學師に任せられた、五月には貫練場の諸規則が左の如く發布された。

一、入疊致度者は當所へ申出づべし聞濟の上は留學證印を渡すべし

一、入疊申出づる者は其國組長或は頭寺等の添書なければ之を許さず尤も宿請合書等は舊例の如

し(下略)

(當時の留學證印は目下整理中の本山文書科の古文書中に發見された)

五月十三日貫練場内に宗學華嚴天台俱舍唯識外學の科を置き寮舍を分ちて入疊者の希望によつて志願せしめた。そして六舍各に舍長正副を置いて所化を監督せしめた。講義時間は左の如くである。

一等學師 宗部 從午前七時 至同九時

二等學師 宗部 從午前九時半 至同十一時

三等學師 他部 從午後一時 至同二時



而してその講義研究の様式は三日連講し第四日が講究檢問であつて講究檢問には其の科の講師がその任に當つた。かく三講一講究三講一講究して第九日を休暇とした。又毎月四日と廿八日は御命日で休暇となつて居た。尙生徒の登級方法が五月十九日布達された、それに依ると、

一、學徒を一等二等三等に分つこと

一、入疊滿三年を以て年滿とし安居十夏を以て夏滿とし擧げて一級を進むること  
一、試業は各月六回の講究と一檢査を以て人材を熟知し其の登落を定むべきこと

此の登落受檢が五月廿四、廿五日に行はれて居るが、受檢者は豫め得意の部を届出でて受檢することとなつてゐる。檢査場は本山の廣間控室は接見の間で午後一時から檢査を開始し長幼の順に受けるのである。檢査を経ない者は等外學徒で寮舍等の洒掃は此の等外學徒と三等學徒の任務であつた。扱て此の年の夏講は貫練場改正後最初の講筵であつて、此夏講の懸席料と云ふものが都て三十七錢五厘、春秋二講の懸席料は十二錢五厘であつた。又此時より講師以外儀同學師までの講義を副講と稱し所化の分を會讀と稱することになつた。かくて十一月廿日、法主殿より在疊學徒へ對して左の如き感賞が有つた。

當夏已來炎熱を厭はず寒冷を凌ぎ強て艱苦を嘗め殊に貫練場も未だ建築の舉に至らざれば寮舍狹隘起臥不便の所に於て日夜艱苦勉勵致し候段憫然の至りに付き大法主台下の御手許より感賞の爲

## め金廿五圓被遣候事

八年六月十三日貫練場規則の改定があつた。そしてこゝに去年五月十三日設けられた六舎の制度は廢止されて組織の上に學科目の上に面目を新にするに至つたので有るが、幸か不幸か爾來屢々其の制度は改變され遂に朝變幕改の歎あるに至るのである。扱て此時の改定は貫練場内に専門科普通科の二科を置き普通科の内に普通上等普通下等を分ち、各々六級とし三ヶ年を以て全科を卒業して専門科に入るのである。課目は普通下等に於て宗乘、餘乘、講讀、作文習字、算法、書、地理、史學、博物、物理の十課とし、普通上等は宗乘、餘乘、因明、史學、外教、政治學、詩文、算法、算書、雜科の十課とし、餘科に古言學、梵言學を置いた。専門科には宗乘、眞言、華嚴、天台、法相、三論、律、俱舍の八課をおき宗乘及他の一課を專攻せしむるの制となした。時間は午前八時より午後五時迄である、今その詳細な時間課目表は繁を避けて記載することを止める。此年の幕れ場内に小教校を開設し普通下等の課業をこゝに移し、後ち明治十一年七月一日中教校の開設するや普通上等をこれに移し、大教校の開設によつて専門科をこれに移し、以て大中小の教校を一派子弟の教育大系と爲した。八年十一月一日には育英教師の兩校を開設し前者は天才教育の機關とし、後者は各府縣下の中小教校の教師養成の機關とした。是に於て一派の教育機關學事の施設は未曾有の完成を遂げたのである。而して小教校に入る學童は滿六歳より在學十年、中教校は十六歳より在學十年、大

敎校は廿六歳より在學又十年である。六歳より三十六歳まで修學の期間とし小敎校卒業を以て住職並敎導職の資格となしたのである、次に育英敎校に於ては一派の連枝より平僧に至る俊英拔群の者を精選し傳燈の眞敎師たらしめんが爲めに三部經四書の素讀を終る者にして、八歳以上十七歳已下の者廿五名を定員とし在校二十年一年一名五十圓を本山に於て支給し卒業後連枝に亞ぐの資格を與へたのである。今其の敎場規、入校心得、借書規、舍規を略して學規に就て見るに、先づ學課を甲乙兩科に分ち各科各六級を分ちて緯とし又内外二部を分ちて内部に本宗餘宗を分ち外部に九學を分ち以て經とし乙科より甲科に入るのであつて、毎年六月と十二月に大檢査を行つて級の登落を定めたので有る。其の課目は本宗學、餘宗學、國學、漢學、英學、佛學、數學、理學、政法學、印度學、宗教學であつた。又敎師敎校に於ては普通下等第四級即ち小敎校第四級程度の試験を行つて合格者を入學せしめた。生徒の年齢は十八歳以上三十五歳以下とし在校三年卒業の上試験を経てその結果に應じて一等より五等までの得業の稱號を與へ一等二等の得業は中敎校三等以下は小敎校の敎師とし派遣されたので有る。在學期間は三ヶ年一ヶ月一人五圓が本山より賦與せられた。その修學課目は普通上下等並に専門科即ち小中大敎校の課目を合したものであつた。此の育英敎師兩敎校の開校式に當つて法主より金三百圓也の御下賜が有つた。當時兩敎校の敎授として主なる人々は南條神興坂上元兵衛、舟橋振、菊池純、藤井最澄、榛間法海、溪雲嶂等である。尙前述一言した如く此年七

月廿二日貫練場内に設置された編集局は八月八日開局式を爲し其の前日編集書目編集定則が制定された、其編集書目は、

一、御本書略解 同論題

二、三經略解 同論題

三、七祖聖教各部之略解 同論題

四、和讃略解 同論題

五、御文略解 同論題

六、御假名聖教略解 同論題

七、天台、華嚴、禪、真言、三論、法相、俱舍、成實、律の各大意

八、大念佛宗、西山派、鎮西派、時宗、日蓮宗の各大意

九、婆羅門教、火教、猶太教、天主教、希臘教、耶蘇教の各大意

十、白河派、吉田派、伊勢兩部派、本居派、平田派、黒住派の各大意

で有つて宗部の略解は廿五歳已下の者の爲めの論講用であり宗部の提要は普通科の試験用のものであつた。而して略解提要は香月院の講義に依つて製作し補缺には適宜、易行院等のものにも依つたので有る。尙此の編集局に於ける編集監督兼修長は香山院龍温、修撰は小栗栖香頂、編集修撰は富

櫻默惠、貌姑射德令、中岡智學、安藤晃耀、細川千巖、編集潤文師は菊池純等であつた。扱て明治九年には各府縣下に小敎校が開設せられたが左に一覽表を以て示せば、

二月廿一日(開業)	大坂府下小敎校	大坂難波管刹内に於て
四月五日(開業)	東京府下小敎校	東京淺草管刹内に於て
五月十五日(開業)	岐阜縣下小敎校	岐阜管刹内に於て
六月五日(開業)	滋賀縣下小敎校	長濱管刹内に於て
六月十二日(開業)	尾張國小敎校	
六月十三日(開業)	三河國小敎校	
七月七日(開業)	石川縣小敎校	金澤管刹内に於て
七月廿四日(開業)	越中國小敎校	
十月十八日(開業)	江蘇敎校(上海別院内)	
十一月(開業)	直隸敎校	

等略以上の如くである。五月廿七日中小敎校の條規課業表に幾分の改定があつて小敎校には特に幼年學童の爲めに豫科が設けられた。又同日敎師敎校内に内典専門豫科を開設し卒業の者は直に大敎校に入るを法とした。入學年齢は二十歳以上卅歳以下であつた。明治十年一月九日敎師敎校規則の

改定があり十七日育英敎校條規の改定があつた。二月十六日各府縣下の末寺共立の小敎校を小敎支校と稱へ來つたが爾今共立小敎校と改稱することに成つた。之れは本山直接の經營では無いが從來一派の中學に改變され本山の經營に移る前身として記述の必要が有る。三月九日京都大坂東京の三府下小敎校は府下の二字を除いて京都小敎校東京小敎校等と呼稱することに成つた。又滋賀縣下小敎校を湖北小敎校と改稱し新に湖南小敎校を大津別院内に設置した。三月十日には長崎共立小敎校を長崎小敎校、久留米共立小敎校を筑後國小敎校に引直した。四月十九日には従前本校同様の授業を施して居た地方共立敎校は爾來豫科のみを授業する所と爲した。八月五日には山形七日町專稱寺内に山形縣下山形小敎校が開設され十月十五日には姫路地内町本徳寺内に兵庫縣下播磨小敎校の開設が有り、十一月十六日には高田別院内に新潟縣下米南小敎校が開設された。斯くの如く各地に小敎校は設置され宗門子弟の教育は其成果を遂げんと爲したので有るが、上は本山より下末寺に至るまで固より充分なる財政基礎の有る譯で無く、爲めに其の維持に支障を生ずるに至つたので有る。されば十一月には小敎校の維持法に付て告諭が出で同時に永續資金方法なる別冊が布達された。此の方法なるものは各地小敎校平年の經費大約三萬圓を要するものとして資金を三十萬圓とし其の資金を有志各自に負擔せしめその利子を以て毎年三萬圓を寄附せしむるの方法を爲した。又元資金一時に寄附する者の方法も立て各地各組に勘定方三名を置いて扱はしめ毎年六月十五日と十二月十五

日との二期に納入せしめたのである、十一年一月九日には支那留學生薦舉法が制定された。三月十七日には直隸敎校が廢止され江蘇敎校のみと成つた。七月十九日には攝播兩湖の四校が廢され京都小敎校内に合併された。その理由は地理的にその特設の必要が認められないと云ふに在つた。又七月一日には育英敎校の階上を假校舎として中敎校が開設された。九月八日貫練場内の編集譯文兩局は都合に依て閉局となつた。當時散斯克小文典の刻成は完結されたので有る。因に其の本典校正者の氏名は左の如くで有つた。

本典校正者 一等譯師補 舟橋 振

同翻譯者 三等譯師補 栗原 重冬

同翻譯助成者 太田 祐慶

同 金松 空賢

十二年五月廿七日には支那の江蘇敎校も廢せられて内地の教師敎校へ轉設された。六月八日には貫練場を貫練敎校と改稱し左の布達が有つた。

今般專門學科實踐之爲め貫練場を貫練敎校と改稱し該敎條規等別冊之通相定候條此段相達候事

此の貫練敎校は中小敎校卒業者を正則生とし三十歳以上にして專門志願の者を變則生とし毎夏の講業を本講副講の二講とし本講は前後二講各宗乘一部副講は餘乘一部とし本講の夏講に終らぬものは

秋冬二期に續講せしめ以て専門の學に於て大成を期せしめたのである。又生徒の學階を熟業得業の二級に分ち他を級外生と稱した。講究の如きも四講一講究の順序を以て五日目毎に行ひその夏講は六月一日より八月廿六日迄春講は三月一日より四月十日迄を一期とした。學科目の部類は本宗部、俱舍部、成實部、律部、法相部、三論部、天台部、華嚴部、眞言部、禪部、雜部、の十一部であつた。斯くして明治七年五月六舍を置いて外學を取り入れてより一時は史學外教政法まで課目とせられた貫練場も敎校と改稱されるに及んで再び純然たる佛敎學研究の道場に復古したので有る。此年十月三十日には敎師敎校分校の事務條例を制定し主として中小敎校の敎師となるべき者に授業の方法を講習せしめた。十三年二月廿六日には敎師敎校は育英敎校内に合併され中敎校は敎導習練場へ移され習練場は元の總會所へ移轉した。そして敎師敎校の跡へ奈良の小敎校が設置されたのである。又二月二日には進業學員の規程が達せられ敎師敎校普通科卒業及諸部學生の内傑出の者を選び才學の長短修業の精粗に應じて進業學員又は同心得に任じた。その待遇は學員は五等敎授の次列心得は一等敎授の次座と云ふことで有つた。三月二日には敎師敎校の専門豫科生を貫練敎校の附屬生に引直し平生は課業表に依つて修學せしめ夏春兩期は講本に就て講習せしめ全科卒業の者は正則生相當の級に編入せしめ優秀卓越の者は成業試驗の上儀同學師補又は五等敎師に採用した、七月廿八日には育英敎師の兩敎校並に中敎校の三校を合併し上等普通敎校と改稱しその條規を發表した。



是に於て一派の學事施設は一時の膨脹より緊縮せられて今や殘る處の者は小教校大教校貫練教校と此の上等普通教校の四教校と成つたので有る。清國の兩教校は滅亡し翻譯局又夙に閉局となり今又育英教師中教校の廢名となり一時隆盛の時代に鑑みて衰頹の色無き能はざる狀況で有る。されば此の上等普通教校の使命は重くその目的も單一では無かつた。其の條規第一章にも看取し得る如く第一には小教校等の卒業者で有つて大教校に進入せんとする者第二には小教校の教師たらんと欲するもの第三には漢英學を修して専門に入らんと欲する者は等の三者を育成する所で有つた。學科も甲乙二科に分ち甲科には宗乘、餘乘、漢學科、(附科)理學、數學、數學科、(附科)漢學、理學、梵學科、天文學、乙科には宗乘、餘乘、漢學科、(附科)理學、數學、英學科、數學、(附科)漢學の課目とした。

明治十四年五月廿三日勸學例が發示せられて一派の學事施設は又是に於て整理さるゝことゝ成つた。是れ従前より一つ落しに縮少せられ來つた爲めに、その施設に一脈の統一を缺ぐが爲めで有らう。されば其の勸學例の中にも、

吾が宗教宣布の基礎を鞏くするは教校を旺盛にし教則を完全にし以て人材を養成するに在り、本派從來教校の設け有りと雖も教則に至りては尙未だ完全ならざる者あり、故に今將に大に舊慣を釐革し教校を盛にし奮て學業に勉勵せしめんとす、因て爲めに勸學例を定む

と。而して其の第一條には本派全國の勸學事務を本山教育課に統攝し監督すべき事を規定し、第二條に敎校は貫練敎校上等敎校地方敎校の三種と定め、第三條第四條第五條第六條に於て三種敎校の性質を制定した。夫れに依れば地方敎校は末寺の住職を養成する機關であり上等敎校は専門兼學の二事に分ちて高等なる學術を授くる處とし、貫練敎校を以て更らに宗門最高の専門學場として専ら宗意を研鑽練磨せしむる處としたので有る。就學年齡の如きも地方敎校は十歳以上廿歳以下、上等敎校は地方敎校卒業以上、貫練敎校は二十一歳以下とした、其の貫練敎校の例規には本校特命の講筵を夏講春講秋講三期に分ち夏講は五月十五日より七月廿六日迄春講は三月二日より四月十五日迄秋講は九月二日より十月十五日迄と定めた。但其の講義は終年不絶である。尙夏講に本講副講都講會讀講究等の有ることは略十二年度の制度と同じで有る。かく十二年度改稱され次に改定された貫練敎校も十五年十二月廿八日には又大學寮と改稱され、同時に三講者の職も再び舊に復して此年香山院は講師職に就いたので有る。其後上等敎校も十七年一月廿一日に大學寮に屬して大學分寮と爲した。斯くの如くして三敎校は遂に大學寮と地方敎校とに減少し、爾來屢々大學寮はその制度を改變し地方敎校又幾多の曲折を経て中學に併攝せられて行くのである。

顧ふに明治初期十五年間に於ける大谷派の學事施設は、王政維新の激變に際し邪教横行に刺撃せられ輸入文明に觸發されつゝ多大の苦心と幾多の犠牲とを拂つて改變に改變を重ねて送迎に遑無き

程で有るが、政府の大中小學の教育大系が明治五年發布せられてより今に微動だもせぬに比して、其處に如何なる缺陷が伏在されて居るので有らうか、宗門學事施設の一端を窺ふ者の三思せしめらるゝ處である。

以上は極めて粗漫なる記述であり未完成の研究である。書くべき事柄も残つて居る。書かねばならぬ事柄も多く有らう。但だ匆忙たる間に急遽此の稿を起した所以は此の事縁に依つて、偏へに御教示を蒙らんが爲めで有つた。